豊田佐吉翁を現代に蘇らそう！　ＶＩ

講師：北路透（北見昌朗）
制作：北見式賃金研究所

世界的な発明王　豊田佐吉翁

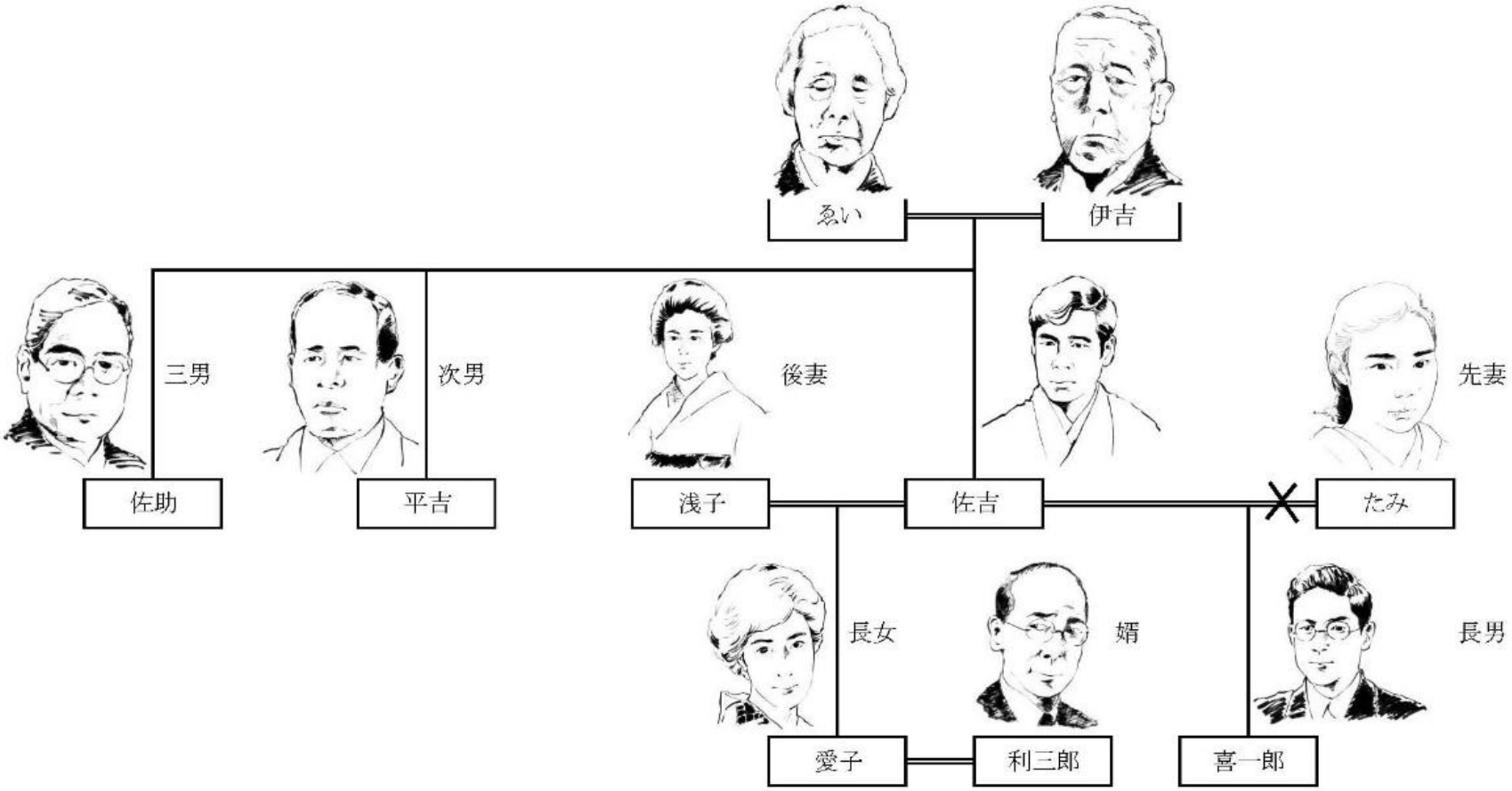
　豊田佐吉翁は、教科書に載っているけど、案外知られていない

　だって、本が無いし…、テレビドラマも無いから。

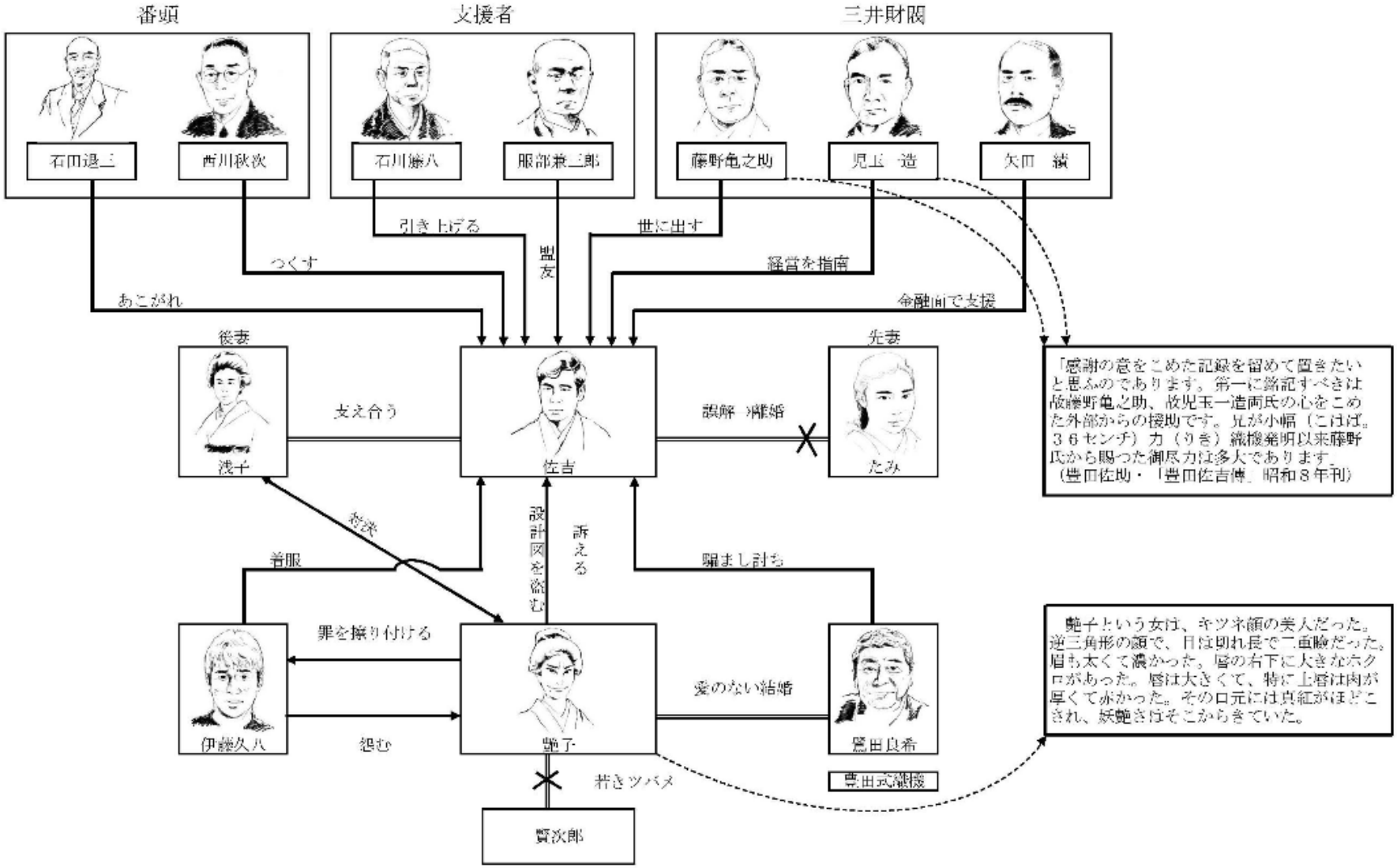
　３０歳から、亡くなる63歳まで、ほぼ名古屋で暮らしていました。

　名古屋が誇る偉人をもっと知りましょう。

豊田家の家系



小説の主な登場人物


番頭
石田退三
西川秋次
支援者
石川藤八
服部兼二郎
三井財閥
藤野亀之助
児玉一造
矢田　績
引き上げる
盟友
世に出す
つくす
経営を指南
あこがれ
金融面で支援
後妻
浅子
支え合う
佐吉
誤解　離婚
先妻
たみ
「感謝の意をこめた記録を留めて置きたいと思ふのであります。第一に銘記すべきは故藤野亀之助、故児玉一造両氏の心をこめた外部からの援助です。見が小幅（こはば。３６センチ）力（りき）織機発明以来藤野氏から賜った御尽力は多大であります。
（豊田佐助・「豊田佐吉傳」昭和８年刊）
移送
設計図を盗む
訴える
着服
騙まし討ち
罪を擦り付ける
伊藤久八
恨む
艶子
愛のない結婚
豊田良希
豊田式織機
艶子という女は、キツネ顔の美人だった。逆三角形の顔で、目は切れ長で二重瞼だった。眉も太くて濃かった。唇の右下に大きなホクロがあった。唇は大きくて、特に上唇は肉が厚くて赤かった。その口元には真紅がほどこされ、妖艶さはそこからきていた。
若きツバメ
賢次郎

父「伊吉」は名工

　豊田佐吉は慶応３年、湖西で誕生した。伊吉（左）とゑいの子で、長男だった。

　伊吉は、社寺建築を手掛ける名工で、二宮尊徳の信奉者。

偉人に「母」あり。語り部「ゑい」

ゑい（左）は、日蓮宗に帰依して深い愛情で子供たちを育てた。

機織りをして家計を支えたので、佐吉は母親が機織りをする音を聞き流れながら育った。

佐吉が12歳で書いた作文

「太平洋の真ん中に大きな島を作る。僕は大きくなったら、太平洋の真ん中に島を作ります。その島は日本よりも大きくて、広い土地があります。そこには田や畑がいっぱいあって、お米や野菜が沢山とれます。日本から多くの人がいじゅうして、くらせるようになれれば良い。日本はだんだんお金持ちになって、世界中で一番偉い国になります。この村の衆も住めるようにしてあげます。ここはびんぼうな村だから、ゆたかな土地をもらえれば大よろこびしてくれると思う。僕は、その島で王様になります。家来が沢山いて、えらい人になります。おとっちゃとおっかちゃにも、大きな家をたててあげたい。この夢は、ぜったいにかなえます」

荒唐無稽だったので、皆が笑った。

笑われたことが悔しかった佐吉は家に帰って、ゑいに今日あったことを話した。書いた作文もゑいに渡した。
ゑいは「まあ、なんて素晴らしい。大きな島を太平洋のど真ん中に作るのだって？　そんなことができたらええわね。みんながきっと喜ぶ」
と、満面の笑みを浮かべた。

１２歳で織機を直した佐吉を褒めたゑい

　ゑいが使っていた織機が壊れてしまった。
　「どうしよう…。これでは納期に間に合わない。納期遅れすると、叱られちゃう。もうお仕事をもらえなくなるかもしれない」
　と、溜め息。
　佐吉は壊れた部品を作り直すことに熱中した。壊れた部品を紙の上に置いて線を引いて型を取りながら、同じモノを作ろうとした。
　ゑいが「メシだよ」　と、声を掛けても返事もないので見に行くと、佐吉は刃物と錐（きり）を持ち、部品作りに熱中していた。
「おっかちゃ、できたよ」
　ゑいは、感激のあまり声を出した。
「す、凄げい。どうやって、こんなことができたのけ？」
　と、佐吉の眼を見た。
「お前は、どえらい子じゃ。こんなことができる子供はいない。大人だって、できる人はあまりいない」
　ゑいは、一重瞼の細い目を一層細くして笑った。

21歳にして立志

19歳になった佐吉は専売特許条例を知り発明家を志すようになった。「大工を辞めたい」と言い出して伊吉と衝突。

何を発明すべきか迷っていた佐吉だったが、母「ゑい」が苦労して機織りする姿を見て、「織機」を目標にすることを決めた。「衣は日本の将来にとって重要な問題で、誰かによって解決されねばならない大事じゃ。一生涯を捧げたなら、できないことはない。よし、やらまいか」。
佐吉は納屋にこもって発明に取り組むが、村人から理解されずそしりを受けた。だが、ゑいは息子を信じて励ました。

「やらまいか」とは遠州弁で、「やってやろう」という意味である。

悪戦苦闘の末、初の発明に成功

- 佐吉は、納屋に引き籠もり、織機の発明に打ち込んだ。こしらえては壊す、こしらえては壊すの繰り返しだった。ようやくでき上がったのは明治２３年１０月の頃だった。最初の発明「豊田式木製人力織機」の完成である。
- だが、売れなかった。

無理やり結婚させられてしまう

佐吉は明治26年、父に無理やり結婚させられる。

だが、新妻の「たみ」（左）は夫を理解できず苦んだ。

新妻「たみ」の怒り

- 佐吉は、発明の支援者を求めて、妻子を残して失踪。
- 　「たみへ。織機の発明のため、少し家を出る。しばらく家を空けるので、よろしく頼む。後のことは、母に頼んでおく」という置手紙。
- 　たみは、佐吉を許せなかった。
- （あんたにとって、私はどんな存在なのけ…）
- という、やり場のない怒りが込み上げた。
- （許せねえ）

動力で動く織機の発明を目指す

- 知多の乙川村で石川藤八に会って支援を得て、動力織機の発明に着手する。
- （左の写真は、記念碑）

支援者石川藤八との出会い

- 佐吉が石川家を訪ねたきっかけは、知多の岡田村で
- 「石川家は仕入先の機屋を大事にしている。今の当主の藤八さんは若いが敏腕で、バッタン織機も産地で初めて導入した」
- という評判を聞いたからだった。

佐吉の意気込みに惚れた藤八

　佐吉は、「蒸気で動く力織機を発明します。どうか支援をお願いします」と語った。
　藤八は、「でも、ほんとにそんな力織機を作れるかや？」と首を傾げた。
　発明には多額の費用が要った。
「その力織機の発明には、どいだけ要るんですか？」
　佐吉は、唾を呑み込んでこたえた。
「オカネはだいたい千円必要です」
「ええ、千円もかや！」
　藤八は、思わず腕を組んだ。そして天井を眺めた。眺めること５分、そして口を開いた。
「そいじゃあ、できんかったらどうするんだ？」
「必ずやり抜きます」
「こんだけのオカネを使うんだったら、できんでは通らんぞ」
「もちろんです」
「その根拠は何だぁ？」
「だって、必要だからです。日本には、動力で動く織機が要るからです」
「ほいで、できんかった時は…」
「その時は、切腹します」

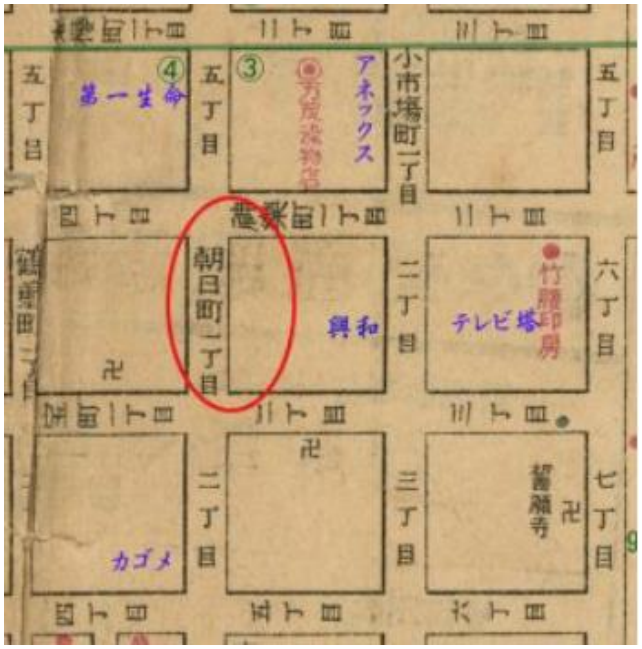
後妻「浅子」との出会い

- 石川家の女中・浅子（左）は、佐吉の食事の世話係だったが、次第に心を寄せるようになっていた。

遂に動力で動く力織機が完成！

- 佐吉は明治28年、力織機の発明に成功した。それまでの機織りは人力に頼る農家の家内工業だったが、機械を使った近代的工業に変える画期的な発明だった。
- 従来の手織りとは比較にならないほど高い生産性だった。
- 織布は機械工業へと飛躍する第一歩を切り拓き、明治以降の日本を支え、多額の外貨を獲得する産業へと発展する。

騙されて窮地に追い込まれた佐吉



- 佐吉は、糸繰返機（かせくりき）を発明した。それを事業化するために、伊藤久八と共同で事業を興した。
- 「豊田代理店　伊藤商店」という屋号だった。
- だが、久八は遊び人で、オカネを持ち逃げした。佐吉は訴えられて多額の負債を負った。
- 佐吉は半田乙川にいたので住んでいない。

偉人に「妻」あり　糟糠の妻浅子

- オカネを持ち逃げされた佐吉は、裁判所で敗訴し窮地に追い込まれた。その佐吉を助けようと浅子が押し掛けてきた。佐吉と浅子は夫婦になり、再起を目指して、明治29年、宝町の地（テレビ塔付近）で「豊田商店」を創業した。ここが佐吉の事業家としての第一歩であり、豊田財閥の発祥の地になった。

窮地の佐吉を助けた服部兼三郎

- 佐吉は、石川藤八の紹介で、服部兼三郎と知り合った。
- 佐吉は、伊藤久八に騙されて破産寸前だったが、兼三郎の協力もあって再建にこぎつけた。

料亭花月で呑み明かす

三人（佐吉、藤八、兼三郎）でよく呑んでいたのは、料亭花月（かげつ）だった。花月は富沢町四丁目で、現名古屋市中区錦三丁目２１番地（ＵＦＪ名古屋営業部のブロックの東側）である。広小路七間町の交差点を北へほんの数歩、その西側だった。

花月の亭主は杉野直一（なおいち）といった。

なお、この杉野直一は、河村たかし名古屋市長の祖父（母の父）にあたる。

乙川綿布合資会社が発足

- 藤八は、佐吉が力織機の発明に成功すると、それを使った事業化に一気に突き進んだ。

- 明治３０年１０月２１日、乙川村（現半田市乙川高良町）で、新しい会社が設立された。乙川綿布合資会社である。

武平町工場が完成

- 豊田商店は明治30年、この地に工場を建てた。織機を作りながら、自らも織布をした。

三井物産から評価され“時の人”に

- 乙川の綿布工場が織った製品が三井物産の藤野亀之助（左）の目に止まった。
- 綿布の輸出が課題だったので、力織機を考案した佐吉は不世出の発明家として喧伝され一躍時の人に。
- 武平町工場には、井上馨とか大隈重信などの有力者が視察に来た。

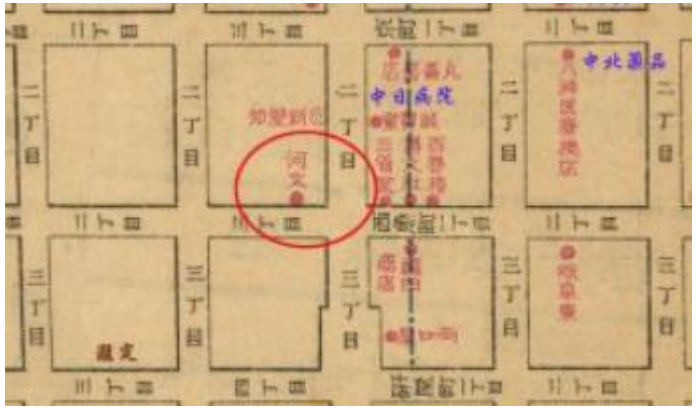
「豊田式織機、英国製に敗れる」

- 　日本海海戦で、日本は完勝した。だが、同じ頃、神戸の鐘ケ淵紡績兵庫工場で、各国の織機を並べての性能比較試験が行われた。その結果、英国のプラット社の性能が群を抜いていた。
- 　佐吉は、愕然とした。あまりの悔しさで自分自身に対して腹が立ち、ほぞを噛んだ。
- 「日本人の知恵が勝るとも劣らねえことを証明してやらまいか」

経営危機に陥り、資本家の傘下に

- 大口顧客であった服部兼三郎の倉庫が全焼し、豊田商會は連鎖倒産の危機に陥り、資金繰りに窮して倒産寸前。
- 銀行は、豊田式織機という会社を作り、佐吉の特許をすべて譲渡するのを条件にして借財を肩代わりする計画を出してきた。いったんは拒否したが、他に術がなく受け入れた。
- 明治40年、新会社豊田式織機が設立され、佐吉は常務になった。

辞任に追い込まれる



豊田式織機は、社長と佐吉が対立し、のっぴきならぬ状況に。

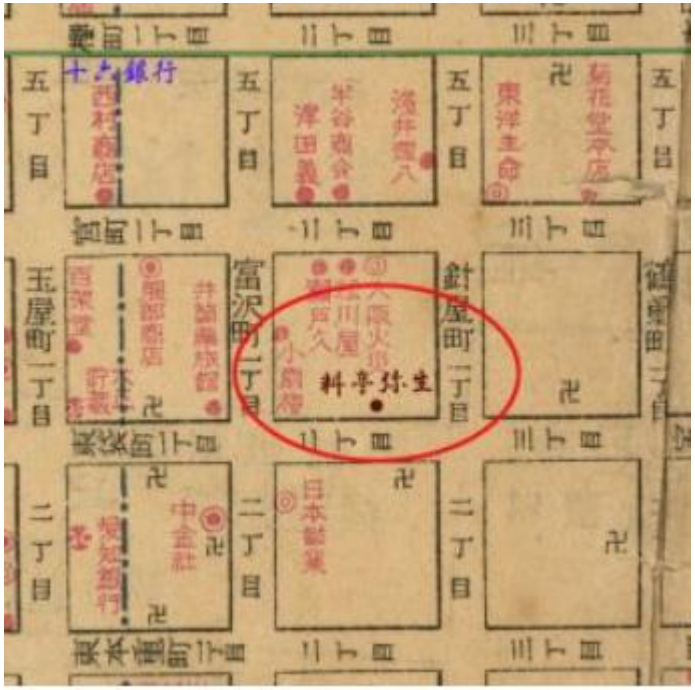
資本家にとり、佐吉は卵を産み終わった鶏だった。

明治43年５月、河正旅館で役員会を開き、佐吉を辞任に追い込んだ。佐吉は「なに言ってるだ！　発起人らは当初、国家的事業だから、営業は我々が引き受ける。君の発明を援助したいと言っていたではねえか。しかるに、何の予告もなしに『辞職してもらいたい』とは何事じゃ」。

帰国した佐吉は栄生で工場建設へ

- 　城山三郎が『創意に生きる―中京財界史』の中で次のように描写している。
- 「大正元年の秋、名古屋の町を西に出はずれた愛知郡中村大字栄生の三千坪ばかりの土地にちょっとした工場の建設が進められていた。その工事現場へ、ほとんど日曜ごとにやってくる一人の中学生があった。秀でた眉、しまった口元からは負けぬ気の性格がひらめいていた」
- 「彼は明倫中学校の四年生。上級学校への進学が目の前に迫っていた。しかし進学が許されるかどうか、まだ分かっていなかった」
- 「彼の父親が一年九カ月もかかって、資金を集め歩き、その苦心の結晶が、工場の建設となって現れた時、誰よりも喜んだのは少年であった。（久しい父の不振！　しかし、この工場さえうまく行ったなら）」
- 　周囲が不安そうに見守る中、栄生の豊田自動織布工場は、大正元年に完成した。これが独立自営の豊田自動織布工場の始まりだ。佐吉は47歳。工場は、再起をかけた城だった。

名言「障子を開けてみよ。外は広いぞ」



錦三丁目に名古屋ガーデンパレスがあるが、道路を隔てて東北側のブロック（三丁目21番地）に料亭弥生があった。豊田家は重要事項を話し合う時にそこをよく使っていた。

「障子を開けてみよ。外は広いぞ」という名言はそこで発せられた。

上海進出の是非を巡って激論

大正８年末、佐吉は上海工場を造る目標を立てたが、社内からは強い反対があったので話し合いの場が設けられた。出席したのは、佐吉、浅子、平吉、佐助、児玉一造、藤野亀之助、利三郎、西川秋次のほか、古参幹部だった。

佐吉は目標を述べたが、危険性を指摘する向きが多かった。佐吉はすくっと立ち上がり、障子をパシッと開け放ち「障子を開けてみよ。外は広いぞ」と言った。

煙草の火を消して「ああ、もう」と言いながら、立ち上がったのは弟の平吉だった。

「ええい、どうせ兄ちゃの作った会社だ。兄ちゃがそこまで言うなら、仕方ない。みんなもそれで承知しろ」。こうして上海への進出が最終決定された。

豊田佐吉の名言集

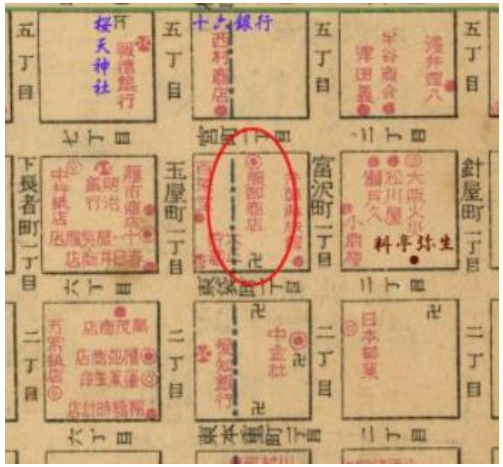
- ***「いくら儲けたいの、いくら儲けねばならんのと、そんな横着な考えでは人間生きてゆけるものではない」***
- 　報徳社に入り二宮尊徳の教えを学んだ伊吉は、口癖のように息子たちにそう言い聞かせた。
-
- ***「大丈夫だ。世の中の多くの人の為に、またお国の為にと言う考えで一生懸命に働いてゆけば、食う物も着る物も自然とついて来る。午前様がいつもそうおっしゃっている」***
- 　佐吉は、東京で機屋を開業したが失敗して帰郷した。おまけに脚気病に罹っていた。落ち込む佐吉に対して、母ゑいはこう言って励ました。

- ***「このオカネは貸してやるだけだ。ええかい、男は四の五のいらぬことを考える必要はない。志を立てた以上、迷わず一本の太い仕事をすればよい」***
- 　佐吉が武平町工場を建てる際に、伊吉は田畑を売って作ったオカネをポンと差し出して言った。

豊田佐吉の名言集

- ***「仕事は人が探してくれるものではなく、自分で身付けるべきものだ。職は人が作ってくれるものではなく、自分自身でこしらえるべきものだ。それがその人にとっての、本当の仕事となり、職業となる。とにかくその心掛けさえあれば、仕事とか職業とかは無限にあるといっていい。いつの時代でも、新しいことは山ほどある」***
- 　喜一郎は東大を卒業して帰郷した。「ところで、お前、これからどうするだかね？」と訊かれると、佐吉に「上海紡績工場原動所設計書」と題した書類を渡した。驚いた佐吉は満足気に眺めこう言った。
-
- ***「わしの今日あるのは、天の心というものだ。それなら、こちらも社会へ奉仕せにゃいかん道理だ。誠実というその字を見ろ。言うことを成せという言葉なんだよ」***
- 佐吉は、昭和５年にめっきり衰弱し、枕元に来た喜一郎にこう言った。

ゆかりの地を歩く。宮町。



服部兼三郎の服部商店は、日露戦争後に大発展した。その店は、宮町にあった。

その服部商店で、社長秘書だったのは石田退三（左）だ。

なお、この地は現在、興和の駐車場になっている。興和は、番頭の三輪常次郎が引き継ぐ形で再建した会社である。

石田退三が書き残した佐吉との出会い

- 　兼三郎は、宮町に店を構えていた。兼三郎の秘書だった石田退三は大正４年、佐吉を初めて見た。
- 「ある日、皆が忙しく立ち働いている店先へ、古ぼけた小さな袋を手首にかけ、もそっとした恰好のおっさんが一人はいってきた。物もいわず、だれにも挨拶せず、黙ってわたくしらの座っている前の椅子に腰をおろした。店の出入りや街から流れ込んでくる喧噪を知らぬ気に、椅子によりかかったまま、敷島（煙草）をふかして、何事かをじっと考え続けている。年齢のほどは五十歳前後で、職業のほどもむろんつかみどころがない。なんにしても一種異様な人物である。
- 　そこへ、外から帰ってきたのか、奥から出てきたのか、しばらくたって服部社長が、ヤアと一声かけて現れた。その人はちょっとしたお辞儀も返さない。
- 『いよう、今日もまたお金ですかい』
- 『うん、ほかに用事などない』
- 『いかほど』
- 『今日はちと大きいが。25万円ほど欲しい』
- 　このようなやりとりがあって、その日は25万円借りていった。現代では数億円に匹敵するだろう。二人のやりとりに、私は度肝を抜かれた」

昭和25年の経営危機を救った石田退三

石田退三は、トヨタ自動車を再建した大番頭だ。常滑市の貧農の息子で、進学できず丁稚奉公に出されるところ、遠い縁戚にあたる児玉一造の支援で滋賀県立第一中学校を卒業した。

一造の紹介で、石田は服部商店に入社した。

石田は兼三郎の死後、児玉一造の紹介で豊田紡織に入社した。豊田紡織は、一造の弟の利三郎が常務だった。

「小説やらまいか　豊田佐吉傳」到知出版

前編　母子の金字塔（明治３６年まで）　偉人に「母」あり
佐吉は、母「ゑい」が苦労して機織りする姿を見て、楽にしてあげたいと織機作りを志す。周囲から理解されない中で、母「ゑい」は息子を褒めて励まし続ける。悪戦苦闘の末に動力（蒸気）で動く織機の発明に日本で初めて成功する。それは機織りを近代的な工業に飛躍させる画期的な発明だった。日蓮宗に帰依する母と子が打ち立てた金字塔だった。経営能力がなく失敗を重ねるが、後妻浅子を得て人生が拓ける。浅子は機屋の女将さんとして工場を切り盛りして豊田の基礎を築く。

後編　病いとの闘い（明治３７年以降）　偉人に「妻」あり
日本は日本海海戦で勝利するが、同じ頃、佐吉は英国製織機との品質テストで敗退してしまう。「世界一の織機を発明して、日本人は知恵で劣らねえことを証明してやる」と、完全無欠の自動織機の発明に執念を燃やす。だが、脳卒中という病魔に２度も襲われてしまう。「このままでは死んでも死に切れぬ」と布団の中でほぞを噛む佐吉を支えたのは長男喜一郎だった。喜一郎は発明を完成させて特許申請を行い、長年の悲願を達成する。